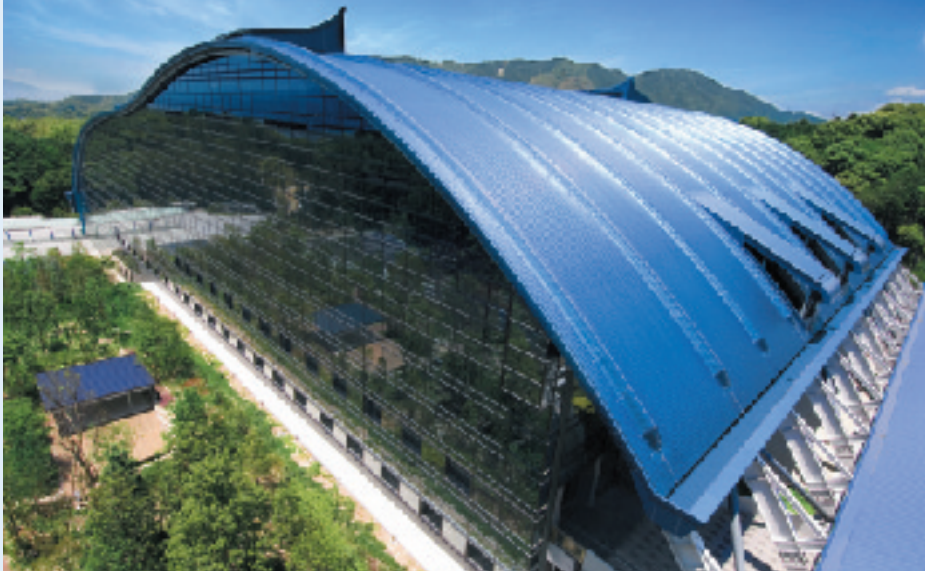


地元百年の悲願が結実 わが国4番目の国立博物館が誕生

九州国立博物館

西欧化をスローガンに近代国家をめざした明治期、日本の古美術や文化財の保護に力を尽くし、日本美術院を創設した岡倉天心は、いち早く明治32年、九州に国立の博物館の設立を提唱した。その後百有余年、東京 京都 奈良に続き、首都の歴史を持たない地として、はじめて国立の博物館が誕生、地元の悲願が百年を経てまさしく結実したといえよう。



周辺の鮮やかな緑を映すガラス張りの壁面 従来の重厚な博物館のイメージを変えた斬新な外観デザイン (写真提供:九州国立博物館)

西鉄太宰府駅からの人並みは、いままでの太宰府天満宮の参道からさらに奥へ、引きも切らずに続くようになつた。山麓からエスカレーターに乗り、虹色の光のトンネルを動く歩道で抜けると、青いガラスに覆われた巨大な建物が姿をあらわす。2005年10月16日に開館した九州国立博物館である。

【歴史的風土と国立博物館誘致活動】

日本書紀にも登場し、九州一円を治めたとされる太宰府は、かつて「遠の朝廷」と呼ばれ、奈良期から平安期にかけて壮麗な建物が立ち並んだ。しかし941年、藤原純友の乱ですべてが焼失、いまも大宰府跡には当時の大きな礎石が並び、千有余年の風雪の流れを物語っている。そして平安期、当代一流の学者であり政治家として右大臣にまで上りつめながら、この太宰府に左遷された菅原道真を祀る天満宮は、全国の天満宮の総本宮として、いまも年間600万人におよぶ参詣客を集めている。1971年、この天満宮がその保有する土地を国立博物館用地として福岡県に寄贈



アプローチの動く歩道 刻々と変化する虹のトンネル



ブルーの列柱が印象的 正面奥は洗練されたレストラン棟



合唱団と観客でホールがギッシリ「第九」コンサート (写真提供:九州国立博物館)



特別展「うるま ちゅら島 琉球」首里城正殿を模した入口



「触る 作る 遊ぶ」がテーマ 楽しい無料ゾーンの「あじっば」

することが契機となつて明治以来の誘致活動に弾みがつくことになる。1992年には、地元財界が(財)九州国立博物館設置促進財団を設立して建設費募金活動をはじめ、続いて1994年、文化庁は「新構想博物館の整備に関する調査研究委員会」を発足させ、建設推進がいよいよ本格化した。国と地元が連携、協力して管理運営する「新構想博物館」の始動である。この博物館で特筆すべきは、地域の子どもたちと市民の参画である。シンボルとなる定礎の文字が地元中学生によって書かれたのははじめ、開館後の館内のガイドや来館者の誘導や保存・修復エリアなどを巡るバックヤードツアーには、300人におよぶ館のボランティアが組織され



地元中学生の書 博物館の理念の象徴

開館後の館内のガイドや来館者の誘導や保存・修復エリアなどを巡るバックヤードツアーには、300人におよぶ館のボランティアが組織され

【建物の特性 保存科学の拠点】

建築設計は東京江戸博物館などで実績のある、株式会社清田建築設計事務所(株)久米設計のJ.V.が公募型プロポーザルによって選ばれた。床面積約3万㎡、日本最大規模のこの博物館の特性のひとつは外観のガラス張りである。紫外線や気温・湿度などの外的要因を嫌う博物館は、従来は極端に窓の少ない重厚な建築にならざるを得なかつた。

の結実といえるだろう。

【効果を発揮した地域の総合力】

地域とともに、市民とともに、を掲げるこの九州国立博物館は、この5月14日現在で入館者が150万人を突破した。当初予想をはるかに上回る数字で、文化財に対する人々の価値認識の拡大と深化という目的の達成もさることながら、地域への経済的な波及効果は試算中ではあるものの、百数十億円にのぼると見込まれている。

それらが実現した背景には行政や経済界、学会などの積極的な活動がある。太宰府市は、早くも大正期1920年代において太宰府跡や水城跡の史跡指定を行い、戦後の1980年代からは美観地区指定、建築協定条例、歴史の散歩道整備事業などを順次展開、そして2000年には天満宮参道周辺地区に対して15mの高度地区、門前町特別用途地区指定を行うなど、地域住民とともに歴史のまちを景観の保全と形成に取り組んだ。さらに2002年には「太宰府市まるごと博物館基本計画」を策定、博物館への散策路の整備などをすすめて、太宰府

天満宮や九州国立博物館のあるまちにふさわしい、風格のあるまちなみづくりをめざしている。地元では太宰府ブランド創造協議会を組織、天満宮参道や幹線道路を中心にのぼりや歓迎旗を配置するなど、個性的なまちなみのまちのイメージ醸成をすすめている。一方、学者グループによる季刊誌「ミュージアム九州」の役割も見逃せない。この雑誌は博物館誘致のシンクタンクである、博物館等建設推進九州会議の機関誌であるものの、やさしい学術誌を標榜して編集されている。考古学、歴史、民俗、生物地学等の教授や学芸員による、いわば学際的な知の結集である。1981年に創刊後80号を数え、博物館に対する啓蒙から誘致にいたるまで、この雑誌が果たした役割は極めて大きい。

文化の世紀にあつて日本とアジアとの交流をリードする拠点として、博物館の新しいあり方を示した九州国立博物館の今後に大きな期待がかかっている。

たのに対し、ここでは内側に壁で囲まれた箱のような展示・収蔵空間を設け、外側を複層のガラス面で覆うという、魔法瓶のような二重構造によって、温度と湿度を一定に保つ画期的な設計となっている。また本来では展示のためのメインフロアになるべき二階部分に、あえて収蔵庫と修復室をおき、さらに収蔵庫の内装には九州の木材を多用することによって、保存科学の拠点と「コンセプト」を実現させた。この高いレベルの保存環境は企画展・文化交流展への出品者・寄託者の安心と信頼を得る事ができ、展示品の充実と円滑な運営に大きく寄与することとなった。



新しい試みとして評価 収蔵庫の内部がのぞける窓

【開館記念特別展 「美のシリーズ」と文化交流展示室】

この博物館の基本コンセプトは、「日本文化の形成をアジア史的観点から捉える」である。開館記念特別展の第一弾は、九州初公開の正倉院御物をはじめとした「美の国 日本」、第二弾は、中国と周辺民族との交流をたどる「中国 美の十字路」、そして第三弾は、「うるま ちゅら島 琉球」で、それぞれ九州のもつ地理的・歴史的文化的な特性に力点を



外国人学生の参詣も多い 学問の神様菅原道真を祀る太宰府天満宮



門前町らしい情緒が保たれている天満宮参道



太宰府市まるごと博物館基本計画で整備された散策路



千有余年の歳月が刻まれた広大な太宰府「都府」楼跡



多彩な来館客 人波が絶えない博物館正面入口